

点検・不動産利活用

一般財団法人日本不動産研究所

第14回

蔵造りの町並みが人気の観光地

お、その際に川越である“時の鐘”も焼失してしまったが、川越を愛する商人たちは自らの店や住まいも再建していく。そこで、真っ先に“時の鐘”を直したというエピソードがある。

その後、昭和30年代後半以降になると、東京のベッドタウンとしての需要が

58)年に市民団体である「川越蔵の会」が設立される。「川越蔵の会」の設立以降、蔵造りの再生活用の機運が高まり、商店街による各店舗の整備、自治会による町づくり検討等を経て、99(平成11)年には伝統的建造物群保存地区の決定がされている。

たせ、電線類の地中化や道路整備をすることにより景観の良くなっている。また、所有者の高齢化や世代交代等による商売が當まなくなつた歴史的建造物については、建造権を借り受けて転貸人を代わりに探すなど、枠にとらわれない活用策を講じることにより減失や損傷を防いでいる。

全国的に人口減少および高齢化が進む中、インフラの維持費等を考慮すると都市機能を中心部に集約化することが効率的であるとも言われるが、都市中心部以外の地域においては各地域の強みを生かす取り組みが一層必要となる。市民の誇りである町並みが維持・保存され、更に経済面においても観光地としての地位を確立している川越は、町づくりの良いモデルケースとなるはずである。

路だけでなく水路を利する利点を生かし、江戸を支える重要な物資の生産として繁栄していた。

取り残されたような状態となってしまう。そのため、建物が建て替え時期を迎えても資金繰りが思うようにいかず、感造り商家の取り壊しが相次ぐことになるが、専門家による町並み保存の提言や、それに賛同する川越を愛する人たちによつて、83（昭和

存するのではなく、町に再び活気をもたらすことを目指している。そのため、文化財の維持費・修理費の補助のほか、建築物や屋外広告物に制限を設けることで町並みに統一感をも



修復された現在の“時の鐘”

全国的に人口減少および高齢化が進む中、インフラの維持費等を考慮すると都市機能を中心部に集約化することが効率的であるとも言われるが、都市中心部以外の地域においては各地域の強みを生かす取り組みが一層必要となる。市民の誇りである町並みが維持・保存され、更に経済面においても観光地としての地位を確立している川越は、町づくりの良いモデルケースとなるはずである。